

社会的地位

2024. 2. 24

学校の先生、すなわち教員は、世の中から、どのように思われているのだろうか。聖職という言葉がある。教職は聖職と言われた時代があった。現在はどうか。もはや言われなくなったように思う。それだけ、教職に対する世間一般の見方が変わってきたということか。

イギリスの The Varkey Foundation が定期的に公表している G T S I (Global Teacher Status Index) というものがある。世界主要 35 カ国における教職に対する尊敬度合い及び教員の社会的地位を指数化したものである。世界教員地位指数とも呼ばれている。

日本の世界教員地位指数 (G T S I) は、調査対象 35 カ国中 18 位である。これを残念な結果と見るか、このくらいだろうと見るかは、判断が分かれるところである。多くの人たちは、日本の教職に対する尊敬度合い及び教員の社会的地位は、下がってきていると考えているのではなかろうか。私もその一人である。教員の一人としてもそう思うし、教員というものを客観的に見てもそう思う。

結果を見ると、中国、ギリシャ、トルコ、韓国、ニュージーランドが上位に並ぶ。そして、17 位がドイツ、19 位がイタリアである。それぞれの国で教育システム、教員の報酬、宗教などの違いがある。私が知っている範囲でも、教員をやりながらアルバイトをしないと生活が成り立たない国もある。以前、イタリアにいたときに、イタリアでは教員の社会的地位は、決して高くはないことを聞いていた。そのイタリアとさほど変わらない位置に日本がいる。そう考えると、やはり残念な結果と捉えるべきなのであろう。

教職に限らず、社会から尊敬を得られない職業には、優秀な人材の流入に制約が生じる。この調査においては、労働時間の長さや賃金の低さなど、日本の教員の待遇面における問題も指摘されている。その結果、子どもが教職に就くことに肯定的な保護者は 11% である。これは調査対象 35 カ国中 33 位である。こちらの方が、由々しき結果である。

この調査結果を裏付けるように、日本の教員採用試験の競争倍率は、年々低下している。民間企業においては、採用母集団の減少は、人材の質の低下、量の不足、ひいては企業の競争力の低下につながる。これと同様のことが、教育の現場においても生じているのかもしれない。いかに優れた教育システムを構築しても、実際にシステムを運用するのは教員である。仮に教員の質の低下、量の不足が生じているとすれば、質の高い教育は期待できない。

日本の社会においては、伝統的に教職は尊敬の対象であったはずである。こと教職に対する尊敬という点においては、誤った方向に変質しているように感じる。社会の教職に対する尊敬を取り戻し、教員の社会的地位の向上を図るためには、まずは現職教員の努力が必要なことは言うまでもない。今こそ、教員の奮起が望まれる。